

艦娘「私達の提督」

オパール

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

横須賀

舞鶴

佐世保

呉

その四つの鎮守府のそれぞれの艦娘たちが想う提督達
彼女たちにとっての提督とは……………

※艦これ未プレイ

※知識はアニメ、四コマ、アンソロ、SSからのみ

※俺得最優先ですのでア艦という方はそっ閉じで

目次

白く、白く、吹雪のように | 1

白く、白く、吹雪のように

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「ぬあーおわんねえー」

「それでも結構進んでますよ？あと一息です司令官」

「ここは横須賀鎮守府」

「ぼやくのはこの鎮守府の司令官」

「そして、特I型駆逐艦一番艦、吹雪。それが私の名前」

「なー、吹雪ー。ちつとばかり休憩にしねえ？」

「だめですよ。さつきもそう言っただけのままサボろうとしてたじゃないですか」

「いーじゃんかよう。吹雪が秘書艦なのも久々だしここんところ書類仕事ばっかで萎えるしさー。久しぶりなんだしゆっくりしようぜーイチャイチャしようぜー」

「……………いちゃいちゃ」

……はっ!?

「だっ、だめです!その手には乗りませんからね!」

「その割には今一瞬悩んだよねお前」

「いけませんか!一瞬でも「したいな」とか思ったらいけませんか!

「……………ま。冗談はここまでにして。続けるか、吹雪」

「あ……………はい、司令官」

ニカツ、と微笑む司令官

それに釣られて、私も気付けば微笑みを返していた

「……………だっりい」

「あの……………」

「あ、?」

「もしかして、今日ここにいらっしやる予定の、司令官さん、ですか?」

「そーなっちゃったみたいね」

「……………っ!お待ちしていました!」

「え」

「あつ、申し遅れました!私、特I型駆逐艦の一番艦、吹雪と申します!」

『どうぞよろしくお願いいたします、司令官！』

……………それから大変だったなあ

私と司令官の二人だけから始まって、出撃は私一人、資材運用から何から何まで手探りで

でも、司令官は面倒くさがりでマイペースだけど、自分の立場ややるべきことへの責任はちゃんと感じていて、私達一人一人を気遣ってくれて

優しいけどあまりそれを表に出そうとしない、素直じゃない人

……………そして、寂しがり屋な人

みんなそれがわかってる

でも

「……………しゃー、終わったー」

「お疲れ様です」

「ありがとな、吹雪」

「秘書艦として当然ですっ」

「……………吹雪」

「……………はい。失礼しますね」

「ん」

「……あなたは、もう一人じゃないし、一人になんてさせない

「……いつもありがとな」

「……いいえ。お礼を言うのは私達です」

「……好きだよ、吹雪」

「はい……私も大好きです、司令官」

私が、私達が、絶対に

『とりあえず、あれだ。やばいと思ったら撤退。これ遵守』

『……そう、ですね。今は私一人なんですから、沈んだら大変なことに』

『いや、それもあるけどさ。後から来た奴ら全員に守らせるよ、これ』

『へ？』

『沈まれでもしたら面倒じゃん。後処理とか報告とか』

『……』

『俺に負担かけてほしくないんで沈む前に撤退してください、例え押しきれるときでも』

「……この命令のおかげで、ここの艦娘はまだ一人も沈んでいない

一部の方達からは多少の不満は出ているものの、それでも司令官は頑としてこれを撤回しない

姉妹艦や仲間を大切に思う人達にとって、生き残ることを第一とする司令官は敬愛に値するようで

「ほれ吹雪。あーん」

「あー、んっ。ふふっ、おいしいです♪」

「そりゃそうだろうな」

「はい、司令官も。あーん」

「あー」

……そして、私もその一人

「提督うー！ワタシもっ、ワタシもーッ!!」

「姉様！金剛姉様落ち着いて！」

「吹雪ちゃんやんが遠征の間、お姉さまは散々やったじゃないでか！」

「いいなあ……」

「榛名も手伝って！」

「……」

「混ざりたそうね、加賀さん？」

「……………貴女ほどではないわ、赤城さん」

「あらあら〜♪いつも仲良しで何よりだわ、あの二人。ねえ高雄？」

「……………むう」

「……………」

「……………那珂？」

「はっ!? べ、別に気にしてなんかないよ!? 那珂ちゃんみんなのアイドルだし、ファンいっぱいいるし、一人離れたくらいで那珂ちゃん路線変更なんてしないし!」

「私まだ何も言っていないんだけど……………」

……………と、まあ、これでも一部

金剛さんを筆頭に司令官を慕う人は他にも何人もいて

「……………あいつらもうちょい落ち着いて飯食えねえんかね」

「あはは……………」

それでも、司令官は私を一番だと言ってくれた

一番付き合いの長い私、誰よりも傍にいる私、他の人達の知らない司令官を知ってる

私

私の、私だけの、特権

『建造?』

『はい。資材もだいたい充実してきたので、一度新しい艦を建造してみるのもいいかと思
います』

『ふーん。艦種はどんなのよ?』

『そうですね………これなら、思い切って戦艦でもまだ足りるか』

『じゃ、それで。詳しいことわかんねえから任せるわ』

『了解です!』

「おー、もう外真つ暗だわ」

「ずっと仕事でお疲れですよね、司令官」

「ん。そんなわけでめっちゃ癒し求めています」

「………お風呂、沸いてますよ」

「カポーンって擬音、誰が考えたんだろ。すげーよね」

「あまり考えたことないですね」

「まあ考えるほどのことでもないからな」

「それもそうですね。あ、お湯かけますよー」

「はいよー」

……………こうして、一緒にお風呂にも入る仲

最初は恥ずかしかったけど、今は司令官を少しでも癒せるという喜びの方が、ずっと大きい

……………まあ、最近は金剛さんとか赤城さんもやつてるみたいですけど

「サンキュー吹雪。ほい、今度は俺が背中流すよ」

「あ、はい。よろしくお願いします」

マイペースで自由、適度なスキンシップもしてくる司令官だけど、セクハラじみたことは私を含めたごく一部の艦娘にしかない

そして、こういう場でも、よっぼど乗り気じゃない限りは普通に背中を流してくれるだけ

だから、私たちも安心して心も体も晒け出せる

「あ、ついでに髪も洗うか？」

「いえ、それは自分でやりますから」

「そっか」

「……………代わりに、乾かすときはお願いしますね？」

「任せろ」

『この鎮守府も大分賑やかになったよな』

『結構時間も経ちますし、司令官もたくさん頑張っていましたから』

『やれる範囲のことやってただけだな』

『ふふっ。最初は、面倒くせえー、が口癖だったのに、もうずっと言っていないの、気づいてます?』

『そうだったっけか?』

『はい』

『……………ま、でも』

『?』

『吹雪がいてくれた、つてのもあるかもな』

『わ、私なんて別に何も……………』

『……………あー、ダメだ。我慢できねえ』

『え? きやつ!?!』

『……………吹雪』

『し、司令官?』

「吹雪ー？」

「……………へ？あ、ごめんなさい！」

「……………何か考えてたっばいけど」

「あ、いえ、その……………」

「？」

「……………思い出してたんです。その……………司令官が、私に告白してくれた時のこと」

「……………あー、あの時か」

「はい。本当にびっくりしたんですからね？告白どころかその、ぷ、プロポーズまで

……………」

「カツコカリじゃなくてガチのプロポーズな。今でも自分の行動力にビビるわ」

「……………でも、嬉しかったですよ。本当に」

「男たるもの惚れた女にや仮で求愛なんざしたくねーの」

「司令官らしいですよ、そういうところ」

「……………どうして」

『は？』

『どうして、そんなこと、いうんですか?』

『どうしてって』

『わたし、艦娘なんです。司令官みたいな、人間じゃないんですよ? 戦うことしか知らないし、出来ないんです。それなのに……!』

『んー……』

『わたしは、わたしたちは、人の営みなんてしちゃいけないんです! 誰が決めたとかじゃなくて、生まれた時から、そうなんです……!』

『……』

『……でも、司令官の気持ちは、嬉しいです。ありがとうございます。でも……だから、私よりも、ちゃんとした人間の女性を』

『俺は吹雪が好きだ』

『……っ!!』

『確かに間違ってるのかもしれないよ。俺達は住んでる世界が違いすぎる』

『だったら……』

『でも、俺はお前を。今ここにいる、特I型駆逐艦。ずっと一緒にいてくれた、吹雪を好きになった』

『司令、官……』

『他のことは、考えられねえ。……………だから吹雪』

『は、い……………』

『嫌なら嫌、迷惑ならそうと言ってくれ。ダメならダメで……………すっぱり、諦めさせてくれ。そうしてくれれば、俺達は今まで通りの関係でいられる。ただの提督と、その一番の相棒に』

「もう。あんな言い方されたら断れるわけじゃないですか。私だって、その、あの時にはもう司令官のこと……………」

「九割ふられるかと思っただけだな。言ってみるもんだ」

「……………司令官」

「つと……………」

「えへへ……………」

「……………あの生真面目が男を押し倒すまでになるとはなあ」

「司令官のせいですよ……………だから」

「ん?」

「セキニン、ちゃんと取ってください……………貴方の吹雪を、いっぱい、愛して……………」

「……………吹雪」

「しれー、かん……………」

幸せな時間

大好きな人と、想いを交わしあう愛おしい一時

司令官……………」

『エラーが発生します（カシヤツ

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」ダツシユ

「青葉アアアアアアアアアツ!!!」

「見ちゃいました聞いた聞いちゃいました撮っちゃいましたあああああつ!!!」

「待てテメゴルアアアア!!」

キャーシレイカンノケダモノー

カイタイサレテーカー!!

「……………ぶっ」

「あはっ、あはははははっ！」

……………司令官

私、今毎日が楽しいです

楽しくて、幸せです

ありがとうございます、司令官

これからも、ずっと、ずっとずっと

末永く、お願いします——

『わたし、わたしも……………しれいかんがっ、大好きですっ』

……………」

「……………青葉さん」

『オトナな二人！結婚（ガチ）秒読み待ったなし!!』

「……………後でシメる」

「あはは……………でも、私たちの関係つてもう鎮守府中に知れ渡つてるからあまり気にする必要……………」

「いや、これ見て騒ぎ出す奴がいるから……………」

「テエエエエトクウウウウーっ!!」

「ほら来た」

「ああ……………」

「HEY提督ウー! ブツキーばかりずるいネ! ワタシも提督のLOVE欲しいデース
!」

「あー、うっさい。俺は吹雪以外は上司と部下に徹するって何回も言ったろうが。恨む
んなら自分の配属の順番を恨めよ」

「初期艦じゃない時点でもう詰んでるネ!」

「金剛さん……………」

「ブツキー、一晩でいいから提督貸して? 提督も、今なら金剛型全員ついてくるヨー?
」妹達を巻き込むなバカ」

「……………そうですよ」

「ふえ?」

「司令官は、私の司令官なんですから!」

ですから、()は譲れません!

「ガタッ

「加賀さん？」

「いえ、今誰かに決めゼリフを取られたような」

「？」